

講師： 一橋大学大学院経済学研究科教授 奥田英信氏

演題： 東南アジア主要銀行の経営効率の変化と外資系銀行の特徴

日時： 2013年10月10日（木） 14:00～15:20

要旨

本報告は、2004年から2010年の東南アジア7ヶ国のデータを用いて商業銀行の経営効率性の分析と包絡曲線法 (DEA, Data Envelopment Analysis) を用いて総要素生産性 (TFP) の変化の分析を行ったものである。本研究によって得られた主な結果は以下の通りである。

第1に、経営指標による銀行経営の変化を見ると、預貸比率、多角化比率、収益性などの経営指標は、総じて、様々な地域要因による国別の差は大きいですが、地場銀行と外資系銀行の比較では経営特性において区別されるような特徴は観察されなかった。各銀行の経営戦略の相違を反映していることを意味している。

第2に、計測したDEAスコアによると、主要商業銀行はサーベイ期間を通じて比較的良質な経営効率性を維持し銀行間の経営効率の差が小さかった。また、各国の経営効率性指標は、観察期間前半の世界経済好調期、および後半のリーマンショックなどによる混乱期を通じて安定的に推移した。

第3に、2007年から2010年にかけてのTFPの変化は2004年から2007年にかけての変化よりも大きいことが明らかになった。これは、2000年代前半期にはおそらく銀行が競争の激化やより厳しいリスク管理といったのに象徴される新しい経営環境に十分適応できなかったこと、後半期には各行が経済の混乱と景気後退の中で状況に適切に対応する適応能力を身につけ、頑健性を増したことを反映していると思われる。

第4に、マレーシアやフィリピンのような外資系銀行の歴史が長い国においては、外資系銀行と地場銀行の経営効率性は同等であり、年ごとの変化もほぼ同じであった。一方で、タイのような外資系銀行の歴史が浅い国では、初期時点で外資系銀行が地場銀行よりも劣っているにもかかわらず、効率性のスコアにおける差が年々減少していることが明らかになった。

最後に、外資系銀行が地場銀行に比べて常に高いTFP成長率を記録しているわけではないことが明らかになった。しかしながら、外資系銀行のTFP成長率は時間の経過とともに地場銀行のそれを上回る傾向がある。

以上